World Journey

Ryo Awamura

1,旅の始まり

僕は20代のころ、しばらく海外に出ていたことがある。、海外への憧れが始まったのは恐らく中学生かの頃で、そのころから20代半ばになったら海外で暮らそうと夢を持っていた。

もしかしたら、海外は自分を成長させてくれる、そんな淡い期待があったのかもしれない。それと同時に、その時の自分と東京の風景が嫌いだったのかもしれない。

そして、それから10年と少しの歳月が立ち、僕は自分で思い描いていた夢を叶える為にボストンバックを背負って、飛行機に乗り込んでいった。

2,天使の都

夕方に成田を離陸したユナイテッド航空がバンコクに到着したのは既に真夜中だった。二度目のバンコクだが、真夜中に到着したのは初めてだった。

バンコクの別名はクルンテープ。天使の都と呼ばれるバンコク程、昼と夜のギャップのある街は無い。

昼間は街を歩く僧侶に人々はお布施を施し、雰囲気は穏やかな仏教色に溢れている。しかし夜の景色は一変し、辺り一面が派手な電飾のネオンに包みこまれる。

このギャップに多くの外国人は取り憑かれ、そして多くの者がこの街に埋れて行き、そのまま抜け出せなくなっていくのだ。

アジアで一番魅惑な街、天使の都に再び僕は降り立った。空港を出ると、生暖かくネットリとした南国特有の空気が、僕がタイに来たことを実感させてくれた。

タクシー乗り場には何台ものタクシーが客を待っていた。僕はとりあえずタクシーに乗り、行き先をフォアランポーン中央駅と伝えた。

タクシーは高速道路をもうスピードで飛ばし、その速さに不安を感じながらも窓の隙間から入ってくる風が涼しくて気持ちよかった。

3,憂鬱な朝

バンコクに到着した翌日の朝、フォランポーン中央駅の目の前にある寂れた格安のホテルで僕は目を覚ました。目を開けると、天井では東南アジア特有の巨大な扇風機がユックリと旋回していた。

しかし、昨日までは日本で忙しい日々を送っていた僕は、自分が居る場所を理解出来なかった。だが、僕は直ぐに我に帰りバンコクに居ることを思いだした。

そして、あれだけ憧れていた海外生活だったが、いざ来てみると何故か憂鬱になり不安と後悔の入り混じった感情が激しく僕を襲った。

僕が憧れの海外生活にタイを選んだ理由は、タイ人特有の優しい人柄と大らかな国の雰囲気が英語圏や他のアジア圏より生活に溶け込み易いと感じたからだ。

最初は英語圏に憧れは確かにあった。しかし、限られた予算の中でそれが尽きるまでの期間で海外生活を送るには、英語が出来ない僕が人種の異なる英語圏の国で受け入れられるのは難しいと思っていた。

それと比べるとタイ人はフレンドリーで、しかも親日家である。きっとタイ語が出来なくても、タイの人達は優しく受け入れてくれる。タイに来る前は、ずっとそう思っていた。

しかし、いざバンコクで初めての朝を迎え、朝ご飯の頼み方さえも分からない僕には、タイでの生活に慣れていくことが途方もない苦労の先に見えてきてしまった。不安を感じながらもホテルの窓から外を眺めると、バンコクの朝は早くから動き始めていた。

4,ホテルから出ると

憂鬱な気分を抱えながらホテルを出ると、外は眩しいくらいの陽の光が街を照らしていた。ステーションホテルと言う、名前は格好良いが僅か750円の薄汚い安宿から一歩踏み出すと、その太陽が僕の憂鬱を和らげてくれた。

ホテルの目の前はフォランポーン中央駅で、ここを拠点に北はチェンマイ、南はマレーシアとの国境の街であるスンガイコロークへと線路は続いている。

そしてフォランポーン駅を超え歩いて行くとヤワラーと呼ばれるチャイナタウンに辿り着く。チャイナタウンの中でも駅に近い辺りは、夜になると沢山の娼婦が安宿の前で客を待っている。麻薬の取引が行われているような危うさを感じられる一帯もあった。一方で昼間は雑貨屋や食料品店、屋台で賑わっており、鱶鰭や燕の巣などの中華系料理が安く食べられたり、アジアらしい雰囲気の街だった。

そして、初めてのバンコクでの朝食を取るため僕はヤワラーに向かった。しかし、タイ料理と言えば僕はチャーハンと焼きそば位いしかメニューを知らなかった。

だが、チャイナタウンの路地裏を歩いてみると、屋台ではどうやらテーブルに並べられているオカズを選びご飯の上にかけるシステムだと分かった。メニューの分からない僕には、このシステムは色々な種類のタイ料理を知るのに本当に役に立った。

ご飯とオカズを一品選び、20バーツだった。当時のレートは1バーツ3円で、日本から来るとその物価の安さに感動したものだ。味は予想していたものと違い、イマイチだったけど。

さて、これから何処に行こう。お腹が膨れ、行く当てもない僕が思いついた場所はカオサンロードだった。カオサンロードはバンコクに於けるバックパッカーの聖地で、昼夜を問わず観光客と屋台で賑わっている。とにかく、僕は動き始めるしかなかった。

5,ブレイクスルー

数年前に初めてタイに来た時、多くのバックパッカーと同じ様にカオサンロードに宿泊した。タイだけではなくアジアが初めてだったので、陽気なバックパッカーが溢れる雰囲気に圧倒された。

その時の楽しかった印象が忘れられず、僕はトゥクトゥクと言う三輪のタクシーで再びカオサンにやってきた。カオサンは相変わらずバックパッカーと、観光客相手に商売するタイ人で賑わっていた。

白人が多く集まるので、洋風な作りのカフェやレストランが多かった。通りを歩いて行くと、彼らの笑い声が店内から聞こえてきて、まだ来たばかりなのに話し相手が居ない僕はホームシックな気分が急に膨れ上がって来た。

良く考えたら、この様な気分になることは、日本で想像出来た筈。でも、いざホームシックを体験してみると、寂しさが身に染みた。

よく考えずに日本を飛び出して来てしまった馬鹿さ加減に呆れつつ歩いていると、僕はいつの間にか通りの端まで歩いていた。すると目の前に屯しているトゥクトゥクの運転手達に声をかけられた。
ビールを飲みながら談笑している彼らは何故か僕を呼び止め、そしてグラスを渡しシンハービールを注いでくれた。彼らに促され、僕は一気に喉に流し込む。
その飲み方を気に入ってくれたのか、直ぐにもう一杯とグラスに注いでくれた。アルコールが入った僕は、次第に緊張感が解れ饒舌になっていった。

この頃はまだ、タイ語が話せなかった筈だから、どの様に何を話していたのか思い出せない。ただ、運転手達との会話に入れたことは覚えている。そして彼らの仲間に入り、逆にカオサンロードの観光客を眺めていると、僕は急にタイ人の仲間入りをしたような気持ちになった。
この経験は、僕が最初のブレイクスルーを感じた瞬間だった。タイで過ごしていると、人との出会いが沢山あるが、これはその洗礼だった。
これで、何故か自信の湧いた僕は彼らに感謝を伝え、タクシーに乗りホテルへと向かった。初めてタイに受け入れられ、とても嬉しかったのだ。

ホテルに向かい荷物を纏めるとチェックアウトをし、フォランポーン中央駅から列車に乗った。『さぁ、旅を始めようじゃないか。』気分が高揚した僕が乗った列車は、ユックリと動き始め、窓には密集して建てられたアパートに住む人達がノンビリと夕食の準備を始めている姿が映し出され、そしていつしか風景は小さくなっていった。

6,島へ
僕が学生の頃、初めて友人とタイに来た目的はダイビングのライセンスを取得することだった。そのダイビングスクールがサムイ島にあったのだ。
バンコクでさえ東南アジアの緩い雰囲気だったのに、サムイ島まで来ると更に南国の緩さが島全体に溢れていて、僕は飛行場を降りた瞬間から心が踊ってしまった。
綺麗な海に囲まれた島を辺り一面にヤシの木が覆っている。道は舗装されておらず土のままだった。オープンテラスのカフェでバゲットとアイスコーヒーの朝食を食べていると、心地良い風が吹き抜けていく。

朝食を終えてプールや海に移りダイビングの講習を受ける。初めて潜る海の底には沢山の色とりどりな綺麗な魚達が群れだって泳いでいる。
海でのトレーニングが終わると、レストランで乾杯をし、英語で書かれたメニューを眺めて適当にタイ料理を注文する。食事の後はディスコに行き、白人達と踊るのだ。
この僅か４日間で、僕の心は完全にサムイ島に奪われた。日本では味わえないであろう南国のカルチャーショックが僕を夢心地にさせてくれた。

僕はバンコクのカオサンロードの非日常な祭りのような雰囲気の中で、この楽しかったサムイ島での日々を思いだした。カオサンに屯していたトゥクトゥクの運転手と飲み会で僕は勇気づけられ、再び僕はサムイ島の地に辿り着いた。

7,島暮らし
日本に居る頃、海外暮らしの本が好きで良く読んでいた。その中にサムイ島に住んでいる日本人がインタビューに答えていた。

彼はこの島は自然が多く海が綺麗で人々は暖かく、そして何より物価が安い楽園だと本の中で答えていた。どうやらアパートも日本では考えられないくらい安いらしい。
僕は彼が住んでいたビーチとアパートの名前を覚えていたので、島に着いて直ぐにラマイビーチのある彼の住んでいるアパートを目指した。

サムイで一番大きくて賑やかなビーチはチャウエンで、二番目に大きいビーチがラマイだった。ラマイに着くと、意外に簡単にそのアパートは見つかった。受付を訪ねて部屋は借りれるかと尋ねたら、2500バーツ程度で借りられるとのことだったので即決した。
白を基調としたアパートの部屋はワンルームで、トイレは桶を使って水を流すスタイルだった。あまり広くは無かったが、ようやく海外で暮らす準備が出来た僕の胸は高まった。
そしてスタッフのタイ人にその日本人の事を聞いてみると、本当に彼はここに住んでいた。部屋番号を聞き、僕はその部屋の扉をノックした。

8,島に住む日本人
すると、しばらくして日本で読んでいた本でインタビューに答えていた日本人が本当に出てきた。
突然のことに彼も驚いたみたいだが、日本で本を読んでやってきたことを伝えると快く受け入れてくれた。
彼は日本で教師をしていたらしい。何故、日本を離れ単身でサムイ島にやってきたのかは分からなかったが、独身なのでサムイ島なら何十年か過ごせる貯金があると言っていた。

彼はアパートの設備や、街の情報を親切に教えてくれた。そして、このアパートには更に日本人が住んでいることが分かった。その日本人達が集まるので、僕も夜になったら彼の部屋に遊びに来るように誘われた。
しかし、彼は日本で教師と言う安定した仕事に就いていたのに、何故サムイ島に辿り着いたのだろうか。まだ40代であろう彼が、タイ人と結婚をするわけでもなく働きもせず、将来のヴィジョンも無さそうにその日暮らしをしていることが僕には不思議で仕方が無かった。

御礼を伝え彼の部屋を後にした僕は、教えてもらったカオムアンガイが美味しいお店に向かった。初めて食べるカオムアンガイ、柔らかいチキンに辛味の効いたタレを付け炊き込まれたご飯と一緒に口に入れると、鶏肉とタイ米が程よく調和していった。
付け合わせのスープも美味しいのだが、パクチーを舌が受け付けなかった。パクチーが無いタイ料理に物足りなさを感じるようになるまでは、言葉と同じようにまだ先の話しだった。

9,サムイに嵌る日本人
夕方になり再び彼の部屋を訪れると、部屋の前では何人かの日本人が、ハンモックに揺られたり椅子に座りノンビリと過ごしていた。
彼が僕を皆に紹介してくれ、そして皆が自己紹介をしてくれた。驚いたことに、50代くらいのカップルの男性は医者だった。そしてもう一人、僕と同じくらいの年齢の若い男性が居た。
彼らは日本とサムイを行き来しているのだが、どのように日本で働きお金を作っているのかが不思議だった。そこ迄サムイ島に嵌る理由も、まだこの時は分からなかった。

部屋の前で皆が話している会話を聞いていると、次第に夕陽が海の中に消えて行った。辺りが暗くなっても空気は生暖かいままだった。
昼間は見かけた人の気配が夜になると無くなり、誘われるままに僕は皆と彼の部屋に入る。そして彼は竹の筒を出してきた。その筒には細い枝が5センチくらい伸びており、その先端に煙草の葉の様な草を乗せ始めた。
その草に彼は火を付け、そして太い竹筒から出て来る煙りを吸うのである。それを繰り返し行うと彼は次第に表情が崩れ始め、笑い上戸になっていくのだった。

彼が一通り吸い終わると、その竹の筒が隣りに回され、同じく草を吸い始め皆が一様に身体の力が抜けていった。彼等がサムイから抜け出せなくなっていた本当の理由は、この不思議な草に取り憑かれていたからだと、この時にようやく僕は分かったのである。

10,草の正体

彼等が止められなくなっている草とはガンジャと呼ばれ、それを精製した物がハシシと呼ばれ原料は麻である。所謂、大麻である。
彼等はこの草を回し吸いをしながら、当時流行っていた宇多田ヒカルの曲をラジカセで大音量で流し身体を揺らしていたり、笑いながら床に寝そべっていた。
サムイ島ではオープンバーが沢山あるので、簡単にガンジャを仕入れられる。この時は、規制も緩かったのだろう。
サムイだけではなく、辺りの島では満月の夜にフルムーンパーティと呼ばれるパーティも開かれ、多くのバックパッカーが集まり夜な夜なガンジャを楽しんでいた。

ガンジャは人を堕落させる麻薬のイメージが強いが、しかし原料の麻は神秘的な力があるらしい。
古来の日本でも儀式に麻が備えられていたし、この数ヶ月後に僕はタイのある家庭が祈祷師に占ってもらう儀式に参加した時も麻が備えられていた。聖なる植物と、多くの国で崇められているのである。
麻薬としての成分と神秘的な力により、ガンジャは人の気分を良くさせるのだろう。
僕はインドやヨーロッパで多くの人が溺れている姿を目の当たりにしていった。

しかし普通の日本人が、ガンジャで無駄な日々を過ごしている様子には驚愕させられた。特に凶暴になったり発狂する訳でないのだが、ただ生命力の失われた彼等の姿は僕には廃人に見えたのだった。

11,行動

サムイ島での生活は朝起きて、南国らしいオープンカフェでバゲットのサンドイッチとアイスコーヒーを飲み、しばらくして海に出掛け午後はオープンしていないBARでビリヤードをやり過ごしていた。
このライフスタイルは僕が憧れた島ライフだった。しかし、いざ住んでみて日ながノンビリした生活を送っていると、体力の余っている20代の僕は驚くことに僅か数週間で飽きてしまった。
僕はサムイの島暮らしに飽きてしまったが、同じアパートに住んでいる日本人はタイ人の友達や恋人を作る訳ではなく、怠惰な独身生活に何も疑問を感じていないようだった。

僕はせっかく異国に住むチャンスを得たので、もっとタイの生活に浸かりたかった。

そのためにはタイ語をもっと練習したかったのだが、この島にはタイ語学校や大学が見当たらず、勉強の機会に恵まれそうになかった。そして、次第に時が無情に過ぎ去っていくことに焦りを感じ始めた。
島でのノンビリした怠惰な生活に辟易し始めた僕は、気分転換と発想の転換を求めタイの南部を旅に出ることにした。そうと決めた僕はナップザックに少量の着替えを詰め、スラターニ行きのフェリーに乗り込んだのである。

12,異変

実は数日前から肌に異変を感じていた。それでも自然に治るだろうと、処置もせずサムイ島を離れてスラターニと言う街へ辿り着いた。スラターニはサムイ島やプーケットへの玄関口だがさほど大きい街ではなかった。
その頃から、アトピー性皮膚炎が悪化し始め身体中に少しずつ発疹が出来き、それが手足から全身に広がっていくのに時間はかからなかった。そして最悪なことに発疹はジュクジュクと爛れ、それらの多くから組織液と呼ばれる体液が滲みだしてきた。

溢れでてくる体液、そして発疹が他の身体の部位や洋服に触れた時の痛みは酷く、何より体液が止まらなくなっている状態が気持ち悪く、僕の気分は真っ暗になった。
僕は薬局を探してガーゼと包帯を買い、薬も塗らず発疹にあてがった。半袖半ズボンの出で立ちだったので、身体中に包帯を巻いている日本人の姿は異様だったであろう。
タイに慣れてきたとは言え、ストレスを感じていたのかもしれない。そして、環境の変化がアトピーを悪化させてしまったのだ。予想をしていなかった事態に、僕の心は混乱と緊張で張り裂けそうになった。

このまま処置をしなければ自然に治癒をすることはなく、急いで病院に行かなければならない。僕はタイの医療事情は全く分からなかったが、外国での病気なので出来れば大病院で診てもらいたくなった。
スラターニはバンコクから遥か南部に位置する。ここからバンコクに戻る方が良いのか、しかし迷った末に医療技術や設備のレベルが高そうなシンガポールに向かう方がベターに感じた。そうと決めたら、一刻も早くシンガポールに向かいたくなった。

13,国境を越えて

タイ国境の街、スンガイコロークからマレーシアまでは陸路で歩いて国境を渡った。マレーシアのイミグレを抜けると、近くの街まではバスで行かなければならなかった。
僕はバスに乗り、コタバルへと辿り着いた。着いたのはまだ日中だったが、クアラルンプールへはバスで8時間掛かると言う。
それだと到着するのが夜遅くなるので、コタバルに一泊することにした。ホテルはタイと比べると高く1500円くらいだった。

コタバルはイスラム色の強い街で多くの女性がイスラムの衣装を纏っていたのだが、驚いたのは幼稚園児位いの小さな女の子達も同じ様な格好をしていたことだ。
小さな衣装が市販されていることに驚き、また窮屈そうな姿を些か可哀想に思えたのだが、こちらでは当たり前の生活なのだろう。

夜は街の広場で沢山の屋台が出てサティと呼ばれる焼き鳥を始め、マレーシアらしい料理がどれも美味しそうに見えた。コタバルでは、夜になっても子供達が街の広場で遊んでいて、それは日本とはまた違った光景だった。

14,クアラルンプール

コタバルに一泊しバスでクアラルンプールに向かうとそのままシンガポールへは列車で向かうことにしたが、コタバルからクアラルンプールまでは8時間も掛かってしまいクアラルンプールで一泊しなければならなくなってしまった。

初めての東南アジアを縦断。最初はもっと楽にシンガポールへと移動出来ると思っていたが、いざ移動してみると思い通りの時間にバスが走っていなかったり、乗車時間が長かったりとかなり手間取ってしまった。

また、バスのターミナルを探すのにも四苦八苦してしまい、いざターミナルに行ってみると目的地行きのバスが走っていなかったり肉体と精神が磨耗してきていた。

直接、列車でシンガポールに向かっていれば、もう既に到着していたであろう。そう思うとクアラルンプールからでも列車に乗ってしまった方が一番確実にシンガポールに着ける方法だと思い直した

タイとマレーシアは印象としては似ている感じだが、言葉も人の気質も異なっていた。タイは微笑みの国と言われるほど人懐っこい一面があるが、マレーシアの人達は部外者への冷たさを感じられた。

ホテルや駅の従業員は不親切で、なんとなく気持ちの悪い国に僕の目は写った。早くシンガポールへと向かおう。翌朝、起きると直ぐにKL中央駅へと向かっていくのである。

15,病院

クアラルンプールからシンガポールまでは、結局8時間も掛かった。シンガポールの駅はタイのファランポーン中央駅と違って小さかったが、綺麗だった。

さて、これからどうやって病院を探そうか。僕には全くアテが無かった。とりあえず街に出てタクシーを拾い、蚊の鳴くような声で病院に連れていってくれと運転手に頼む。

その様子を見た運転手は、僕が何処かに疾患があると察してくれ、詳しく僕の症状を聞いてくれた。確かに運転手にとっても、何処の病院に連れていけば良いか分からなかっただろう。

僕は親身になってくれたタクシーの運転手に出会えてラッキーだったと思う。

僕は身体中の包帯を見せ、片言の英語で症状を説明した。すると運転手は皮膚科の病院に連れていってくれた。

皮膚科にしては少し大きな診療所に辿り着き、受付で診察前の手続きを終えると僕はようやく救われた心持ちになり心底安心したのだった。

16,処置を終えて

診療所のベッドに横になり中華系の先生が診察を担当し、傷口を見ると直ぐに僕の身体中の傷にステロイドを塗りその上からガーゼと包帯を巻いてくれた。　傷口に同じガーゼと包帯を巻いているのに、ステロイドを塗られると傷口の分泌液が治まり痛みも消えていくようだった。分泌液が流れ出ている気持ち悪さと、傷口が擦れた時に感じる痛みが無くなっただけで僕の気分は良くなった。

処置を終え、先生との問診が始まった。先生は東南アジアは環境が悪い、だから完治しないまま旅を続けたら再び傷は再発するであろうとのことだった。
　そして先生からは、このまま綺麗な大病院に入院するように勧められた。僕も無茶をすると症状は繰り返すと想像でき、何よりも早く綺麗な部屋でユックリしたくなったので入院費も考えず先生の勧めを受け入れた。
　とにかく傷の痛みと長旅の疲れで疲労困憊していた僕は、今から宿を探す余力は無く直ぐにでも横になり深い眠りにつきたかった。

　診察を終えて直ぐに先生は紹介状を書いてくれ、同じく渡してくれた地図を頼りに診療所近くの大病院へと歩いて向かった。大病院は近くだったので、迷うこと無く直ぐに辿り着けた。
　場所はシンガポールの目抜き通りであるオーチャードロードのすぐに側だった。オーチャードロードはルイヴィトンを始め、まるで東京の銀座の如く幾つもの欧米の高価なブランドが旗艦店を出していた。
　近くにはシンガポールスリングの発症であるラッフルズホテルもあった。シンガポールはバンコク、クアラルンプールとは比べものにないくらい洗練されていた。
　そして、その大病院も如何にも高そうな雰囲気が伝わってくる高級感だった。受付に紹介状を渡すと直ぐに入院の手続きをとってくれた。
　そこまでは良かったが、手続きを終えると早速デポジットとして10万円を請求された。日本でも入院したことがなく、入院するのに10万円もデポジットを取られることを知らなかった。僕はこれはこれでえらいことになったと顔が引き攣り始めたのだった。

17,入院生活
　デポジットで10万円と言われ、顔が青ざめたが、ここで引き戻すわけには行かなくクレジットカードを差し出した。それから料金の説明を受けると、なんと一泊が3万円もした。
　少しでも早く退院しなければならない。僕はまだ入院もしていないのに、焦燥感が襲ってきた。しばらくし、部屋に案内されると、そこは綺麗な二人部屋だった。
　入院代は高かったが、良いこともあった。
それは同室の人が、なんと日本人だったのだ。荷物を起き、僕は寝たきりの彼のベッドまで挨拶に行くと彼は嬉しそうな笑顔で僕に挨拶をしてくれた。

　彼は横浜にあるエネルギー関連企業の社員の方で、マレーシアのサラワクに現地調査に訪れていたところ交通事故にあってしまった。
　もう随分長いこと入院しているようで、僕みたいな軽い症状な物が同室になってしまい申し訳無かった。でも、久しぶりにマトモな日本人と話せて、気持ちがだいぶ楽になった。

　綺麗な寝床が確保出来ると、次第に入院費が気になり始めた。僕は海外旅行保険に入ってこなかった。しかし、クレジットカードには海外旅行保険が付帯されている筈だった。
　僕は日本に国際電話をかけて、セゾンカードの保険に必要な書類を調べてもらうことにした。ただ、幾ら英語圏でも英語で必要な書類を病院に用意してもらうことが出来るのか不安は拭えなかった。

18,癒えた傷
　日本の友人にセゾンカードに付帯している海外旅行保険が下りるのに必要な書類を調べてもらい、後は傷が良くなるのを待つばかりだった。
　ステロイドを塗って包帯を巻かれた手足は、僕の予想以上に治りが早かった。

しかし、一泊毎に入院費が高くなる。万が一保険が下りなかった場合、相当な無駄遣いになる。

そして傷が治り始めると、病院から出られない生活が非常に退屈になったていった。この前まで一刻も早く安静になりたかったのが不思議なくらい、早く外に出て動きたくなってくるのだ。
入院してから3日が経ち、肌もスベスベになってきた。そろそろ、退院しよう。僕は朝食を届けに来たインド系の看護師に、拙い英語で退院したいと懇願した。

突然の申し出に看護師は驚いた表情を見せたが、僕は傷も癒えたし退院しても大丈夫だと言うことを強く主張した。とにかく入院費が気になるのだ。看護師は医師に相談すると言い、廊下の向こうに小走りで走っていった。

19,退院
看護師は僕が退院したい希望を理解してくれたが、医師の許可が降りないと退院は出来ないとのことだった。
それでも僕は懇願すると、しばらくした後に医師が僕のところにやってきた。そして肌の状態を確認した。身体中の傷は癒えているように見えた。
なので日本に帰り日本の病院に掛かる旨を伝えると、医師から退院の許可が降りた。すると居ても立っても居られず早速、荷物を纏めて会計に向かった。
結局、デポジットで払った10万円は殆ど戻ってこなかった。僕は直ぐにでもこのお金を保険から戻したいので、病院を出るとHISに直行した。

僕はHISのカウンターで直ぐに日本に帰りたいと伝えると、その日の夜のユナイテッド航空が取れた。
運良くシンガポールに泊まらず日本に帰ることができた。シンガポールのチャンギ空港で、半袖短パンの僕は包帯が目立つのでリーボックのスポーツパンツを買い、体裁を整えて搭乗口をくぐった。
僕の初めての海外生活はこうして一度幕を閉じた。まさか一ヶ月も経たずに日本に帰るとは思わなかったし、余分な航空券代も掛かってしまった。しかし一方では日本に帰られることに安堵もしていた。

20,再出発
初めての海外遠征は、呆気なく終了した。
シンガポールを出発したのは明け方で、成田に到着したのは早朝だった。
僕は入院費で多額なお金を遣ったに関わらず、成田からはスカイライナーに乗ってしまった。日暮里で山手線に乗り換えると、ようやく日本に帰ってきた実感が湧いてきた。
実家に帰ると家族は、予想以上の早い帰国に呆気に取られながら喜んでくれ、近くの蕎麦屋からカツ丼を注文してくれた。

気になっていたセゾンカードの海外旅行保険だが、シンガポールで貰った書類に不備は無く無事に振り込まれることになった。
これには本当に安心した。別途、海外旅行保険に入っている訳ではないので資格要件が厳しいかと思ったからだ
日本に滞在中、僕は日大病院に行き血液検査と皮膚科で肌の診察を行った。どちらも問題無く、念の為にステロイドを多めにもらってきた。

シンガポールで買ったチケットは往復だったので、再び日本を離れる時が来た。僅かな期間の間に再び成田空港へと向かった。

21,再びシンガポール

僅か一週間ばかりの日本滞在が終わり、再びシンガポールのチャンギ空港に到着したのは真夜中だった。相変わらず綺麗な空港でイミグレを出なければ、空港内でも快適に過ごせそうだ。

シンガポールに着いたのは真夜中だったが、生暖かい空気に浮き足立ち始め僕は街に繰り出した。ホーカーズと言われる屋台街で、食べた料理はタイ料理より中華風で美味しかった。

僕は街を彷徨い辿り着いた広場のベンチで寝転び、太陽が登るまで目を閉じた。シンガポールはタイよりも安全だと思う。その雰囲気から、気楽に仮眠することが出来たようだ。

22,移動

しかし、幾ら安全とはいえ、グッスリとは眠れず太陽の光が空に顔を出すと同時に目が覚めてしまた。さて、ようやく朝が来た。僕はシンガポールを観光する気にはならず、そのままジョホールバル行きのバス停に向かった。

シンガポールからジョホールバルは、多くの人が通勤で移動しているのだろう。バスターミナルと言うより、バス停の終点と呼ぶのが相応しいくらい小さな乗り場だった。

僕はとりあえずジョホールバル行きのバスに乗り、今度はイミグレーションをバスで通過した。シンガポールからマレーシアの国境を歩いて超え、待っていたバスに乗り込むとジョホールバルには割と早く着くことができた。バスを降りると近くのバス停から丁度クアラルンプール行きバスが出発するようだったので、僕は直ぐにチケット売り場へと急いでいった。

23,動き出す

さて、旅はこの辺りから、いよいよ動き出す。色々な人との出会いや、出来事が起こり始めるのだ。

ジョホールバルからクアラルンプールに辿り着き、 タイ方面行きの列車までしばらく時間があったので、食事をし街をブラついた。

クアラルンプールの街はイスラム色が強いからかタイと比べると全体の雰囲気が地味に感じられ、料理もタイの方が僕は好きだった。

退屈なクアラルンプールの街を冷やかしていると、ふと『履いている靴、格好良いね』と声を掛けられた。

社交的なタイ人では無く、どちらかと言うと不愛想なマレー人に声を掛けられたので、驚き振り返ってみると話し掛けて来たのは女性だった。

女性に声を掛けられ、嬉しくない筈がない。特に人恋しい異国の地である。しばらく会話を楽しむと彼女は『妹が日本語を勉強しているから教えてくれない。』
そう、僕に尋ねてきた。

冷静になればどう考えても怪しいのだが、僕はマレーシア人の生活が垣間見られるチャンスと捉えて彼女の車に乗り込んだ。

ホンダのシビックを運転していた彼女は身にまとっていた洋服から、裕福な様子が伺えた。車はクアラルンプールの繁華街を抜け、閑静で白く塗られた綺麗な住宅が立ち並ぶ一帯を走っていった。
駅の周辺を歩いていては決して見られない風景だった。車は10分くらい街を走り、直ぐに大きな家に到着した。車を降りると彼女は、ガレージを開けて玄関のベルを鳴らした。

24,扉を開けると

彼女がベルを鳴らすと家の中から母親らしい女性が扉を開け、笑顔で僕にようこそと言うような微笑みを浮かべてくれた。
高級住宅街にあるこの家もまた、大豪邸とは言えないまでも立派な御宅で豊かな生活が想像された。
玄関を上がるとリビングに通され、そしてテーブルに案内された。
お茶が出されて暫くすると、今度はなんと皿に山盛りにされた蟹が出されてきた。

自宅まで着いてきて今更だが、このように豪華な食べ物が出されることにより僕は急に緊張し始めた。毒への不安を感じたからだ。
道を歩いていて声を掛けられ、これだけ歓迎されることなど日本で有り得るだろうか。
いや、恐らくない。これは危険が差し迫っている前兆だ。

部屋を見回すと、僕をこの家に連れてきた女性は既に居なくなっていた。
しばらくすると、代わりに大柄な男性が部屋に入ってきて彼もまた笑顔で僕に挨拶をしてきた。
そして、彼は自己紹介をし始め最後にこう言った。『俺はカジノでディーラーをやっていた。』と。
騙されたと、僕はようやく確信した。遊びで軽くカードをやろうと、彼は僕を別室に招いた。そしてカードを用意し彼が丹念に切るその手を見ると、片方の手の小指がばかりではなく、彼の指には小指しか残されていなかった。

優しそうな彼の雰囲気からその裏に隠されている本性が創造出来るようで、なんとかして逃げなければならない状況に陥ってしまった。僕は咄嗟に予約しているバンコク行きの列車出発時刻が近づいていると、身振り手振りと拙い英語で必死で伝えた。
彼も漸く罠に嵌めた獲物を、そうやすやすと見逃してくれそうにも無かった。
一進一退の言葉の遣り取りが続く。
するとしばらくし彼は根負けしたのか、この場を離れることをようやく許してくれた。

そして、僕は無事に家を出て解放されたのだ。
この時の喜びは何事にも変え難い喜びだった。
彼らの家を出て、僕の目に飛び込んて来た陽の光がこんなに美しいとは思わなかった。
すると何処からか、街で声を掛けてきた女性が戻ってきた。
『乗りなよ、駅まで送るから。』そう言ってきた。
彼女には騙されたけど結果として無事に彼女の家を出られたし、クアラルンプールの街並みをドライブ出来たうえにマレーシア人のお宅にお邪魔出来て、思い返せばなんとも愉快な経験だった。
クアラルンプール駅で彼女は僕に旅の幸運を伝えてきて、僕は御礼を言い駅へと向かった。
ホームで列車の到着を待っていると、コーランが響き渡ってきた。

シンガポールからの大陸横断鉄道がユックリと駅に到着し、僕は寝台車に無事に乗ることができた。荷物を置きベッドに横になり、時間潰しに地球の歩き方をノンビリ捲っていた。
すると本の終わりに、こう書かれていた。
『カード詐欺が多発しているので見ず知らずの女性に声を掛けられてもついていかないように。』
尤もだと、僕は頷いた。

25,ペナン

無事にクアラルンプールを出発することが出来た僕は、部屋を借りているサムイ島へ向かっていた。その道中急ぐ旅でも無かったので、一度行ってみたかったペナン島へ寄ることにした。　　ペナン島へ向かう船の中で、また中年の男性に声を掛けられた。『私の妹が日本語を勉強しているんだよ。』と。流石に僕は苦笑しながら、『それは良いことだ。』と話には付き合わなかったが。　　僕は日本に居た時に、大沢たかお主演のドラマ『深夜特急』をテープが擦り切れるほど繰り返し見ていた。その中で好きだったシーンは、主人公の沢木耕太郎がペナン島の安宿に暫く滞在するシーンだ。日本語の話せる宿の主人達との心暖まる交流が旅の醍醐味を感じさせてくれたからだ。　なので僕はペナンで、沢木耕太郎が泊まったビーチを目指した。　　確かバツーフェリンギと言うビーチだったと思う。
ペナン島は小さな島のわりに随分と発展していて、他の都市で見かけるような公共のバスも走っていたので、フェリー乗り場からバスに乗りバツーフェリンギを目指した。

バツーフェリンギに到着し宿を探していると偶然、【大沢たかおが泊まった宿】と言う看板を発見した。それを見た僕は気分が高揚し、値段も手頃だったのでこの宿に泊まることにしたのだった。

26,結婚式

ペナン島のバツーフェリンギにある、大沢たかおが泊まった宿と看板が出されていた安宿に、僕は泊まることにした。目の前は穏やかなビーチで、同じような宿が点在していた。辺りはとても静かで、観光客も殆ど居なかった。
チェックインした時刻はまだ夕方だったので、僕はユックリとビーチを散策したり、バツーフェリンギの繁華街まで出歩き道端の屋台で売られているサテーを食べながらビールを飲んで海から流れてくる心地よい風を体に浴びていた。
夕方のコーランが街の至る所に設置されているスピーカーから流れ始めたので、散策を終えて部屋に戻りベットで休んでいると不意にドアがノックされた。扉を開けて出てみると、中華系の男が笑顔で佇んでいた。

彼は『これから中庭で、僕の結婚パーティーをやるんだ。良かったら、参加してくれないか。』僕は突然の申し出に驚いたが、部屋に居てもすることがなかったので喜んで参加することにした。中庭に顔を出すと30名位の中国人の集団がテーブルを囲み、既に飲めや歌えでパーティーを楽しんでいた。僕は顔を出すと新郎新婦の目の前に通されて駆けつけ三杯の如くビールを飲まされ、あっという間にホロ酔いになり、アルコールが脳を活性化させてくれたのか英語が泉の様に僕の口から溢れだしてきた。

新郎はマレー系の華僑だったが、驚いたことに新婦は日本人だった。周りに集まっていた人達は、とても嬉しそうにはしゃいでいた。

新郎は気さくな人で、突然のゲストである僕にとても気を遣ってくれ、僕もそれに答えたく精一杯のコミュニケーションを取りパーティーはとても盛り上がった。

ただ一つ気になったのは、新婦と話す機会がなかったことだ。とても幸せそうに見えたが、僕との会話は避けていたようにも感じた。同じ日本人同士、日本語が通じるだけに、突っ込んだ会話になることを避けたのかもしれない。

結婚パーティーの新婦が日本人、参列客の一人が日本人。でも、日本人の新婦とはお互いに挨拶だけで会話は交わさない。周りの外国人から見たら奇妙な光景だか、それがお互い日本人らしい相手への気遣いだと思う。パーティーは遅くまで盛り上がり、お酒が入るにつれ僕は色々な人との交流を楽しんた。マレーシアで初めて人の温かさに、触れた日であった。

こんな良い人達に囲まれていたら、きっと日本人の新婦も幸せになれるのだろう。僕は自分の心が暖まるのを感じながら、自分の部屋へと戻っていった。

27,プーケット

ペナン島を離れ僕は再びタイに戻り、エメラルドグリーンの海と白い砂浜で有名なプーケットを観光して部屋を借りているサムイ島へと戻った。プーケットではお決まりの安宿だが、ビーチ近くの宿のせいか、南国の雰囲気と海風が僕の気分を高揚させてくれた。ビーチの名前は忘れてしまったが、静かで落ち着いた観光地だった。

僕は宿近くのレンタルバイク屋で、タイで良く見かける90ccのホンダのスクーターを借りて島を巡った。しかし、プーケットはペナン島と同じく街が整備され発展し、警察官による取り締まりも行われていてヘルメットを被っていなかった僕は交差点で捕まってしまった。

流石に焦りを感じた僕は、タイ語も英語も分からない素振りをして警察官と話し一生懸命に観光客をアピールしたのだが、結局は許してもらえず罰金を支払うことになった。

だが、警察官は僕に『これを持って、警察署に行って罰金を払いなさい。』と言って用紙を渡しただけで、そのままバイクに跨り走り去っていってしまった。

日本と違い特に点数を引かれることも無かったし、しかも僕は日本の免許しか持っていない。なので、僕はもらった用紙をクシャクシャに丸め、その場に捨てて再びバイクを走らせ宿に戻っていった。

宿の目の前にはとても大きく綺麗なホテルが立ち並び、そしてホテルのビーチ側にはオープンレストランも併設されていて、以前から食べてみたかったプーケットロブスターとシンハービールを食べることにした。

ロブスターは高い値段、とは言っても日本円で1000円以下だったと思う、の割りにはパサパサしていて味が無く美味しくはなかった。

プーケットは各ビーチが離れていて、僕が滞在していた宿から一番賑やかなパタンビーチまではバイクで1時間位掛かるのだが、せっかく世界有数の観光地にやってきたのでナイトライフを満喫するべきだ。

夜の海岸沿いを只管バイクで走り、漸くバ

タンビーチに到着すると観光客で賑わうストリートの店を冷やかしながら歩き、レストランから流れてくる派手な音楽に合わせリズムを取っていた。
一通り街を散策した後はいつものように、オープンBARで飲む。
カウンターとテーブルが有るそのBARの客は、殆どが白人だった。
一人なのでカウンターに座り、相変わらずシンハーを頼むとカウンターの内側に居る女性の定員が話し相手になってくれた。タイ人は仕事でも、プライベートな感覚があるのでタイ語を学ぶ側としては、話す機会が沢山ある。
僕はこの女性定員との会話で良いことを教えてもらった。それはタイ語を学ぶなら、北部にあるタイの第二の都市チェンマイに行った方が良いとのことだった。
チェンマイはタイの第二都市で有りながら、街は広くなく長閑な雰囲気でチェンマイ人の人柄が優しい。物価も安くて、何より大学が幾つもある。プーケットやサムイの様な島に居ても教育レベルが低いので、勉強にならないと彼女は言った。
この情報は有難かった。確かにサムイ島は何もしないでノンビリ暮らすには最適だったが、勉強する機会を探せそうになかった。僕はこの時に、チェンマイへ行こうと決心した。

28,バンコクで途中下車

プーケットでチェンマイに行くことを決め、僕は再びサムイ島で借りていた部屋に戻った。荷物を纏め、お世話になった日本人の方々や、アパートのタイ人スタッフに挨拶をしその足で港へと向かった。スラターニと言う街から、列車でバンコクに向かい折角なのでバンコクに暫く滞在し、本格的に始まるタイ暮らしに必要なツールを準備することにした。まずは銀行の口座を作りたく、バンコク銀行へと向かった。

シティーバンクの口座を日本で作っていたが、タイバーツを預金出来るタイの銀行の方が便利だったからだ。銀行に行くとパスポートを見せるだけで、簡単に口座が作れ、通帳とカードをその場で発行してもらえた。
これでお金の管理が楽になることと、タイでの生活に踏み入れた実感が湧いてきて嬉しくなったことを今でも覚えている。
バンコクには沢山のATMがあり、日本と違い24時間無料で引き出しが出来た上にクレジットカードのキャッシングも出来て意外にも便利だった。
それから、サイアムスクエアと呼ばれるデパートに行き、携帯電話売場でプリペイド式の携帯電話を購入した。これは、残額が無くなったらカードを購入すれば再び通話出来て、カードの残額が無くても待受は出来ると言う優れ物だった。3000円くらいで買えたと思う。携帯電話で後々、役に立ったのはメッセージだ。タイ語の読み書きが出来ない僕は専ら英語を使用していたが、それでも簡単な遣り取りには重宝していくのだった。

銀行口座と携帯電話、これらが手に入ればタイでの生活に不自由が無くなる。不思議なことに、これだけの事で自信がつき意気揚々とバンコク中央駅に向かうため僕はサイアムスクエアから、3バーツを払いNo.24のバスに飛び乗った。

29,チェンマイへ

再びファランポーン駅から列車に乗り、列車はユックリと動き出す。僕はフォアランポーン中央駅の、タイ独特である長閑な雰囲気が大好きだ。幾ら周りに高いビルが建ち、ス

カイトレインや地下鉄が出来て見違えるように発展しても、この駅のこの雰囲気だけは変わらないタイの象徴であってほしい。列車はバンコクの住宅街を走り始めるのだが、駅の近くには住宅やアパートが密集して線路に近く庶民の生活が垣間見られるのが面白かった。

バンコクはタイでの移動の起点になる。そのため僕は今後も頻繁に離発着するのだが、出発する時も到着する時も、寂しかったり嬉しかったり感情が揺れ動いていた。僕はいつもの様に、2等寝台を購入した。チケットは僅か1500円程度だった。この値段で、のんびりと快適に旅が出来るのがタイの良いところだ。勿論、多くのタイ人は3等の木で作られた固い座席に座りチェンマイを目指すので、誰しもが利用出来る訳ではないのだが。

バンコクからチェンマイまでは約12時間くらいかかる。列車はお昼に出発したので、座席はまだ寝台になる前の4人掛けの座席の状態である。列車は徐々にスピードを上げていき僕は暫くの間、辺りに木が生えているだけのタイの風景を眺めていた。

線路と平行している道路では、沢山の日本車が目についた。夕方になると車掌が車内を巡回し、夕食のメニューを持ってくる。メニューを見ると、食堂では60円程度で食べられる料理が300円もしたが、他に食事を取る方法が無いので、ガパオと言う豚挽き肉のバジル炒め目玉焼き乗せを注文した。出てきたガパオは、町の食堂で食べるほうが美味しかった。早い夕食を終えると今度は座席からベッドに変換するために、車掌が一つ一つの座席を周り作業をしていった。

僕の座席もベッドに変えられ、夕日が大地に沈むころには少し早いけど僕も横になることにした。明日のお昼には、いよいよタイの第二の都市であるチェンマイに到着することであろう。

30,新しい生活

チェンマイはタイ北部に位置しバンコクと比べてとても小さいが、タイ第二の都市と言われている。バンコクと比べて気候が涼しく物価も安く人々は優しくて、僕にとってとても暮らしやすい街だった。

チェンマイは中心部に城壁があり、その内側と外側で旧市街と新市街に分かれている。お掘りが城壁の横に沿って流れているのも、街に水辺が有ることで市民を癒してくれている。

僕は城壁にある４つの門のうち、一番辺りが賑わっているターペー門の直ぐ近くに部屋を借りた。家賃は2500B、日本円にして7500円程だった。それでベッドは勿論、シャワー、冷蔵庫、それに電話まで付いていた。

小さなアパートだったが一階にはフロントが有り、日中は常にアパートを管理している女性が居た。名前をメームと言い、小さな可愛らしい女性だった。

理由は良く覚えていないが、ある日彼女は僕を赤くて古い昔のスポーツカーに乗せてくれてチェンマイの山の上にある観光名所の寺院であるドイステープに連れていってくれた。

これが初めて二人でタイ人女性と出掛けた日だった。しかし僕はタイ語が話せず、メームは日本語が話せず、お互いに英語が話せなかった。

それでもなんとなく言葉の意味は伝わり、ドイステープの参拝に始まり食堂でお昼ご飯を食べ、最後には雑貨店を営んでいた彼女の実家にも招待されて充実した一日になった。

車の助手席に乗っていると、何故、言葉の分からない二人が一緒に出掛けているのかが不思議だった。時間が経つに連れお互いの緊張感が解れてきた。そして、彼女が話している言

葉の意味が理解出来ず、僕の伝えたい言葉が伝わらないことがこれ程もどかしいとは思わなかった。彼女の発する一言一言を理解したくなっていったからだ。
　実家の雑貨店や家の中を案内してもらい、居合わせた家族に挨拶をし、緩やかなひと時を過ごし夕方になると彼女はアパートまで送ってくれ、そして僕が車を降りると彼女は素敵な笑顔で手を振りながら再び車を走らせていった。走り去って行く赤い車が切なく、タイ語の話せない自分の努力不足を嫌悪した。

　時として言葉には人生を変えるメッセージが込められている。その一瞬のチャンスを逃してはならない。アパートの部屋に戻り、その日の出来事を反芻し言葉の重要性に気づかされた。真剣にタイ語を勉強しよう。そうすれば毎日が変わる。僕は動きだした。

31,生活が始まる
　チェンマイにアパートを借りてから数日経ち、僕は語学学校を探すことにした。しかし、街のコンビニや数少ない書店に置かれていたフリーペーパーには目ぼしい学校は見つからなかった。
　なのでターペー門の側にあるレンタルバイク屋で一日300円のバイクを借り、市内を巡ってみることにした。城壁で囲まれた繁華街は食堂やインターネットカフェや食料品店が殆どだったので、僕は南の街ラープーン方面にバイクを走らせた。
　暫くバイクを走らせていると辺りにお店があまり無くなり住宅街に入るのだが、不意に偶然、ランゲージスクールと書かれた語学学校を発見した。日本の英会話学校の様な小さなスクールだったが、僕には小さい方が向いていそうだった。

　語学学校の扉を開けると受付の女性が暇そうに座っていたが、僕が語学学校を探していると伝えると丁寧に応対してくれた。話を聞くと午前から午後まで授業があるにも拘らず料金は安かったし、他に探すのも面倒臭いので早速入会し翌日から通うことにした。

　翌日、初めてレッスンが行われる小さな教室に入ると僕の他に二人の生徒がいた。二人とも日本人の女性だったことに驚いた。しかし、チェンマイに住み始めたばかりの僕には二人から日本語で得られる情報は、暮らしていく上でとても有難かった。
　語学学校に通う習慣が出来たので、トレーニングが好きだった僕は次にジムを探したかった。こちらはチェンマイの中心部に見つかったが、値段は安くプールやサウナが付いてひと月3千円だった。

32,居酒屋あさみ
　日中は語学学校、夕方からジムでトレーニングをする日々が始まり、僕のチェンマイでの暮らしが漸く形づけられてきた。
　旅行者から居住者へと心持が変わり、僕の心にも余裕が持て始めてきた。
　僕は一つのマイルストーンを達成した満足感を味わうため、久しぶりに恋しくなった日本食のレストランに行ってみることにした。
　市街を巡っているとチェンマイには幾つかの日本食レストランが在る様子だったが、フリーペーパーを読むとチェンマイ市街から少し離れた場所に日本人向けの歓楽街が在ることを知った。

　この頃の僕は少しホームシックになっていたので、それを解消するために日本の雰囲気を感じたくなっていた。確かにチェンマイランドには日本食のレストランやカラオケ等が数件

隣接していたが、バンコクのタニヤ通りと比べると閑散としていて、しかしそれが逆に地方都市らしかった。
　そうは言っても、チェンマイランドは横に7,800メートルはあったかもしれない。僕はあまり人気の無いそのストリートをバイクで何往復かして目ぼしい店を探して回った。

　すると、辺りはカラオケや少し洒落たレストランばかりなのに、一軒だけ日本の居酒屋の【養老の滝】に似た外観の居酒屋が目についた。店の看板には【あさみ】と書いてあり妙に懐かしい外観だったが、店内が見えないので直ぐには入店できなかった。しかし意を決し店の前にバイクを停め、暖簾を潜り僕は恐る恐る入店した。
　店に入るとタイ人スタッフ達の「いらっしゃいませ」と言う威勢の良い挨拶で出迎えてくれ、僕をカウンターに案内してくれた。カウンターの内側には恰幅の良いこの店のママがどっしりと座っていて、フロアに居たのは3人のウェイトレスだった。

　まだ時間が早かったからか、客は僕が一人目だった。カウンターの内側からママが日本語で「何を飲みますか。」と聞いてきたので瓶ビールを頂いた。
　暫くしてウェイトレスが瓶ビールとコップを僕の目の前に置き、そして注いでくれた。出てきたのは流石にスーパードライではなくシンハービールの大瓶だった。

　店内はカウンターの目の前にはお座敷のテーブルが３カ所在り、割と広々とした空間でBGMとして流れてくる日本の演歌が妙に心に染みた。日本に居た時に、ここまで演歌で心が震えたことはなかった。
　目の前に座っている日本語の話せるママは僕に色々と尋ねてくれて、暇を持て余していたウェイトレス達も簡単なタイ語で僕を構ってくれた。チェンマイに来て初めて多くのタイ人と楽しく会話できた僕は、いよいよタイに居場所が出来たような思いになっていった。

　その日から僕は頻繁に【あさみ】を訪れるようになる。
それは子供のいないママがタイ語も話せない日本の若者を気に掛けてくれたからだが、一人のウェイトレスが少しの日本語が話せ、同じく僕に親切にしてくれたからだ。
　彼女の名前はレックと言い、穏やかで落ち着いた雰囲気の僕と年が近い女性だった。

　僕は夕方まで学校に通い、それからジムでトレーニングすると言う日々を送る様になった。ルーティーンとサードプレイスが出来たからか観光客から住人へと意識が変わり、タイに住んでいると言う自信がつき始めた。この頃から僕はタイ人のコミュニティに入っていくことが出来始めていくのだった。

33,日本居酒屋での毎日
　少し日本語の話せる同世代のレックが居てくれたお陰で、僕はタイでの生活が本当に楽になった。チェンマイの町に慣れてきたと言えども、タイ語は全く読めず辺りのお店の看板もメニューも読めなかった。　レックはチェンマイの町について、タイの習慣について沢山のことを教えてくれた。僕は彼女のバイクの後ろに跨り良く買い物に連れて行ってもらったので、タイ人の生活が分かったり顔見知りが増えてきた。

　レックは独身の女性かと僕は勝手に思っていたら、既に結婚をしていて３歳くらいの女の子が居た。彼女の名前はポーイと言い、意味を聞いてみたら「宝物」と言う意味だった。ポーイは店の中や、目の前の道路を走り回る元気なお転婆だったが、誰からも可愛がられていた。タイ人は本名の他にニックネームをつけられる、レックやポーイもニックネームだ。

当時のチェンマイは人と人の繋がりが強くお互いに生活を支えあっていたので、近所の人達がポーイの面倒を見てくれ、お陰でレックはお店の開店準備に精を出せていた。レックの夫は同じく【あさみ】の厨房で働いていて、閉店近くになり店内の客が少なくなってくると裏口に椅子を置きビールを飲み始めた。　チェンマイランドはチェンマイ市街より少し南に位置する。隣町のランパーン、ランプーンからも近かったため、その辺りにある日系企業の工場で働いている日本人が仕事帰りに飲みにやってきた。あさみに来る全ての客は日本人だった。

僕はジムでのトレーニングが終わり夕方になるとあさみにやってきて、カウンターでビールを飲みながら生姜焼き定食を食べていた。しばらくすると顔見知りの日本人が店にやってきてカウンターの隣に座ると、僕は彼と一緒に再び飲み始めた。これらのお酒はお客さんやママがご馳走してくれた。
あさみに来るのが日課になり、僕もファミリーの一員のようになってくると自然に店を手伝い始めるようになっていた。時間を持て余してビールを飲んでいるのも退屈だったから、お店を手伝わせてくれるのは暇つぶしになり有り難かった。ママはご褒美に食事とビールをご馳走してくれた。そしてほろ酔いになりながらバイクでアパートまで帰って行った。夜になり涼しくなった風と、ビールが心地良くなりバイクの出すスピードも速くなっていたが、直線道路で只管飛ばせるチェンマイの街のドライブは日本では経験できない感覚だった。

そんなある日、いつもの様にあさみにやって来ると、レックから彼女の実家に住まないかと話があった。僕はタイで働いている訳でもないので、アパートの家賃がもったいないと言う。実家には兄が住んでいるが一部屋空いているから、格安で使って良いと言うのだ。僕はアパートを気に入っていたのだが、タイ人の家で暮らしてみるのも良い経験だと思い引っ越すことを決めたのだった。

34,レックの実家

僕は早速、住んでいたアパートを引き払いレックの実家に引っ越すことにした。チェンマイのアパートには基本的な家具が備わっている為に衣類等さえ持っていれば暮らしていけるので、引っ越しはそれらをバックに詰めてバイクで運ぶだけで本当に楽だった。

レックの実家はターペー門より南に位置するチェンマイ門の近くだった。ターペー門がお洒落なカフェや旅行会社が集まっている観光地だとしたら、チェンマイ門は市場や屋台が並ぶ庶民的な場所だった。
レックの実家は路地を入った古い二階建ての家屋で庭もあった。二階には身体の大きい兄が住んでいて、挨拶をすると優しい笑顔で返事をしてくれた。寡黙な方だったが、酒乱だと言うことを後で知る。

僕には一階の部屋を用意してくれたのだが、その部屋はベッド以外にスペースの無い部屋であまりの狭さに驚いた。しかし、好意を無にする訳には行かないので、暫くは我慢することにした。　家は全体的に古く汚く、トイレは水洗では無く便器の側に水と桶が用意されていた。ホテルかアパートのトイレしか知らなかった僕は、庶民のトイレが未だに水洗では無いことに想像以上の日本との差を感じ、東京育ちの僕がこの家で暮らしていくことが不安になるのに10分と掛からなかった。

それでもレックは僕に向かい『ディー マイ（気に入った）？』と聞いてきたので、僕は顔が引き攣りながらも、『ディー（気に入った）』と答えざるを得ずそれで契約と相成ったのである。
僕は快適なアパートでの一人暮らしが一転して、狭くて古い部屋での生活に一転してしまった。居住環境が人間の心理に与える大きさを初めて感じたのだが、とにかく慣れるしかなかった。住めば都に、きっとなることを信じて再び新しい生活が始まった。

35,居候

レックの兄は殆ど一日中、二階のリビングでテレビを見て過ごしていた。仕事はしていないらしい。どの様に収入を得ているのか、いつも不思議だった。
そして毎日、彼よりずっと若い友人達が彼の元に遊びに来ていた。彼らもまた、働いていなければ勉強もしていなそうだった。不良少年少女と言うより、貧困の為に社会に上手く溶け込めていない若者達に僕は見えた。
しかし彼等は僕と合うと、恥ずかしそうな笑顔で微笑み挨拶をしてくれる気の良い連中だった。ある朝、僕が部屋から出ると、若者達の一人が目の前の廊下に置かれているソファーに座り銀紙と白い粉をテーブルに並べ何か作業をしていた。

それはヤーバーと呼ばれる覚醒剤だった。『もう、止めたいんだ。』彼はそう言いながら、ヤーバーを吸う為の作業をセッセとしていた。彼等は貧困ゆえの無知の為に、世の中に仕掛けられている罠に嵌り、そこから抜け出せない蟻地獄に落ちた蟻のようだった。
そんな彼等との生活にも少しずつ慣れ、朝起きると近くにある食堂に行きパッタイと呼ばれる焼きそばかカオパットと呼ばれるチャーハンを注文し、出来上がるまで日本から持ってきた一冊の本を毎日毎日繰り返し読んでいた。

タイには自炊をする習慣があまり無い。なので家やアパートにキッチンが付いていないことが多い。僕は日本ではずっと自炊をしていたので、タイに来て料理が出来なかったのが残念だった。
なので外食で栄養バランスが崩れそうな時は市場に野菜の惣菜を買いに行き、部屋で食べるのだがベッドの上で食べる食事は味気なくつまらなかった。

この様に、なんとか居候生活に慣れてきたのだが、一つだけ我慢できないことがあった。それはシャワーとトイレが併設している為にトイレに入る為にサンダルを履かなければならない。　　そのサンダルがいつも誰かのシャワーで濡れていて裸足での生活習慣からかサンダルや床は泥だらけになっている。お陰でトイレ前に置かれている足拭きマットが常時泥だらけなのだ。
皆、靴下を履く習慣が無いのだろう。裸足にサンダルで外を歩けば、素足は直ぐに埃まみれだ。そのまま濡れたトイレのサンダルを履いたら、もう辺りはグチャグチャだ。

僕は潔癖症では無いが、これには耐えられなく、頻繁にトイレ掃除や足拭きマットの洗濯をしていた。しかし、終わると直ぐに元の様に汚れ始めていた。
ただ、こう書くとタイ人が不潔に感じられるが、僕が見てきた多くのタイ人は日本人より綺麗好きだと思う。僕が住んだこの環境が特殊だったのかもしれない。
人間関係は良好だったが、環境面が慣れきれず僕はなるべくの時間を外で過ごすことにした。そろそろ伸びかけた髪が気になり始めたので、美容院を探す為に3000円で買ったマウンテンバイクに跨り街に出た。

36,美容院

当時のチェンマイにはセントラルと呼ばれる、唯一大きなショッピングセンターがあった。大きいと言っても、バンコクのそれと比べると遥かにこじんまりとしていて人も少なかった。　　僕は伸びてきた髪を切り軽くカラーリングをする為に、チェンマイのファッショントレンドであるセントラルで美容院を探すことにした。

セントラルには幾つかの美容院があり、その中で一店舗だけ特に客が多い店があった。他の店では店員が暇そうに時間を持て余しているのに、この店は待合席にも客がギッシリと座っていた。

店内はとても活気があり暫く待合席に座っていると、ますはシャンプーへと半分上の階へ通され、まだ20歳くらいの若くて可愛いらしい女性が担当してくれた。彼女は無邪気に、タイ語で僕に『日本人？』と聞いてくる。　　日本人にタイ語で「日本人か。」と聞いてくるのがタイ人だ。日本人だったら、外人には英語で話しかけるだろう。これがマイペースなタイ人の人柄なのである。

彼女との会話が弾んだ為か、次にカットを担当してくれた男性も早速僕に話しかけてくれた。聞けば彼が店のオーナーで、まだ店を出し始めたばかりだと言う。

ドイツで働いて勉強して、チェンマイに来たと言う。あまりチェンマイには友達が居ないらしく、直ぐに打ち解けてくれた。そして、これもタイ人らしい面白い人柄だが、唐突に『夜、店の皆と食事に行こう』と誘われた。これが日本だったら、まして東京だったらあり得ないお誘いだと思う。しかし、タイでは不思議ではない。僕は喜んでお誘いを受けることにした。

結局、髪型やカラーは日本の美容院とは同じようにはならなかったが、僕は店が終わる頃にワクワクしながら再びやってきた。営業を終え片付けを済ました従業員と共に、駐車場に停めてあるオーナーの車に乗り込んだ。

37,サプライズ

美容院のオーナーが運転するセダンで向かった先は、タイ風の焼肉のようなシャブシャブのような料理を出すお店だった。

ムーカタと呼ばれるこの料理は、定額制で肉や野菜が食べ放題のようだった。ようだった、と言うのはオーナーが一緒に食事をした従業員と僕の会計を支払ってくれたからだ。　　どうやら美容院のメンバーは毎日、仕事終わりに皆で食事をして帰るそうだった。そして食事が終わり、一人のスタッフはオーナーが寮として借りている部屋に帰っていった。

残る我々は、そのまま車を走らせチェンマイ郊外にあるメーリムと呼ばれる地区にあるオーナーの家に向かったのだが、到着すると僕は彼の家があまりの豪邸だったことに驚愕した。

入り口の大きな門が開くと、そのまま車で入り、敷地内はまるで公園のように広い庭だった。石で出来たテーブルや椅子が幾つか有り、横に動くブランコの様な乗り物もあった。

家も石造りの洋風の建物で、ダスキンのモップみたいな毛むくじゃらの犬も居た。着いて早速すると、オーナーが家から赤ワインを持ってきて、皆にグラスを配ってくれた。

メンバーはオーナー、オーナーの彼女、女性の従業員、そして僕だった。僕の隣に座る女性の従業員はイサンと呼ばれるタイの東北地方の出身で、チェンマイのタイ人女性と比べて

肌の色が黒かった。彼女はプーケットで働いていて、最近チェンマイに来てオーナーの店で働くようになったそうだ。話してみると年齢も僕に近かったし親しみが持てた。

僕のイメージだが、タイ人は会話で既婚か独身かを聞いてくることが多く、独身だと答えると結婚を勧めてくる傾向にあるように感じる。
この時もオーナーは僕に同様の質問をしてきたので僕が独身だと答えると、この僕の隣に座っている東北出身の女性を恋人に勧めてきた。突然だったので、その場は笑って誤魔化した。暫く4人でワインと会話を楽しんだあと、オーナーとオーナーの彼女は先に席を外したのだが、僕とイサンの女性は話が盛り上がりそのまま話し続けていた。
それから、彼女はプーケット時代の写真を部屋から持ってきて見せてくれた。そこには賞を受賞した時や働いている彼女が写っていた。
写真を見ながら、彼女も楽しそうに話してくれて満更そうでもなかった。

38,失踪
しかし、まるでイランにあるアルゲバム遺跡に暮らしていた人々が300年前に忽然と姿を消したように、彼女もまたこの美容院から姿を消していった。
この夜から2,3日が経ち僕は美容院に顔を出すと、そこに彼女の姿はなかった。オーナーに聞くと出て行ったと言う。しかし、よくよく話を聞くとアルゲバムとは違い、一応理由はあったようだ。
何かの理由で美容院のメンバーから皆で責められたらしい。僕も徐々に感じ始めることなのだが、タイ人は仲良くなるのも早いが人を嫌いになることも早いような気がする。そして、それを露骨に表すようにも感じられた。気のせいかもしれないけど、僕がタイ人同士のコミュニティを傍から見た印象だ。

何はともあれ、新しく始まりそうな生活への期待は壊れ、僕の生活は何事も無かったように元に戻っていた。そうは言ってもタイの面白さは、このように意外な時に突然の人との出会いが沢山あることで、そのお陰で文化や日常生活を垣間見ることができたのだった。

気づいてみると、僕はタイに来て３ヵ月が経っていた。この時から、暫くタイと日本を往復することになる。失業保険を受け取る為の認定を受けなければならなかったからだ。
タイに来て少し変わった自分を持って僕は久しぶりにチェンマイのバスターミナルからバンコク行きのバスに乗り込んだ。バスを乗り継いでシンガポールへ向かうために。

39,往復成田
この頃の長距離移動は、夜行バスを選ぶようになっていた。列車と比べて時間通りに到着するし、値段も安かった。
バスにも色々と種類が有り値段が高くなるほど快適になるのだが、チェンマイからバンコクまで1500円程度のバスを選ぶと、2階建てで椅子も十分と幅があり朝まで乗っていても疲れなかった。　僕はチェンマイからバンコク、クアラルンプール、シンガポールとバスで移動するようになり長距離移動にも慣れていった。

何故、わざわざバンコクを通過しシンガポールまで移動をするのかと言うと、当時のタイは日本人に人気がありチケットが取れなかったことと、シンガポールの往復の方が安かった

からだ。　　当時は燃油サーチャージも無かったので、成田とシンガポール間が3万円後半で購入できたのだ。
　僕が利用していた航空会社はアメリカのユナイテッド航空だった。UAはマイルが溜まり易く、同じくスターアライアンスメンバーであるANA、TG、SQ等と比べると少ないマイルでアジア間のチケットに交換出来たのも選んだ理由だ。
　成田とシンガポールを往復すると5000マイル以上積算される。UAだと20000マイル溜まるとシンガポールやバンコクへのチケットと交換出来るので、既にマイルが溜まりつつあり暫く成田とシンガポールを往復する予定だった僕には好都合だった。

　僕はこの時から成田とシンガポールを3往復するのだが、その間に2回ほどビジネスクラスにアップグレードをしてもらえた。その際は500ドル分のチケット交換券ももらえることが出来、随分とお得に旅が出来たのだ。
　　勿論、これだけ手間と経費をかけるだけの利益は失業保険から得ることができた。これは、とても大きな声では言えないのだが。

　　僕がタイ語を話せるようになったと実感したことがある。それはお酒を飲んでほろ酔いの時でも、友達から食事の誘いの電話が掛かってきた時に、それに対して流暢に時間と場所を決めることができるようになっていることに気が付いた時だ。
　　頭の中で日本語とタイ語を翻訳する必要がなくなり、タイ語で思考が出来るようになってきたのである。これに気が付いたとき僕は自信に満ち溢れるようになり、タイに住む外国人と言う殻が次第に剥がれ落ちていきタイ人への感覚と同化していった。

40そしてインドへ

　半年が経ち、タイの暮らしにも慣れもう少し他の国にも行きたくなっていた。
　　バンコクからだとインドは直ぐ近くだったし、ボスポラス海峡を挟みアジアとヨーロッパの境であるトルコも日本と比べれば身近だった。

　日本で航空チケットを買うと日毎に値段が違う事が多いが、タイでは半年間は値段が一律だった。僕は以前から行って見たかった、ヒンズー教の聖地であるインドのバラナシに行くことにした。
　航空券を購入し、チェンマイのインド大使館でビザを申請した。
　　いよいよ旅の準備が出来てチェンマイを離れる前日には、親しくなったチェンマイ在住日本人で年配のご夫婦にレストランで食事をご馳走になった。タイでの生活が半年にもなると、僕には何人ものタイ人の友達ができて、チェンマイ在住の日本人の知り合いもいて充実したタイ生活を送っていた。

　慣れた生活に新しい刺激を与える為、向かうのは初めてのインドだった。期待と緊張感が交錯した想いを胸にチェンマイを出発したのだった。

To be continued